

いのちをつなぐ電話(下)

—〈仙台いのちの電話〉相談員たちの3・11—

ルポライター
山川 徹

●やまかわ・とおる 1977年山形県生まれ。著書に『それでも彼女は生きていく』(双葉社)、『東北魂 ぼくの震災救援取材日記』(東海教育研究所)など。

3・11後の被災地の問題に、震災から一年、二年を経て自ら命を絶つ人々の存在がある。電話相談を通して自殺予防対策に取り組んできた〈仙台いのちの電話〉スタッフたちの3・11後を追った。

仮設のニュータウン

仙台市地下鉄を長町駅で降りてショッピングセンターやファストフード店などが並ぶ通りを歩くと、突然、目前に仮設の住宅群が現れる。二百

二十三世帯、約四五〇人が暮らす仙台市太白区の〃あすと長町ニュータウン〃だ。宮城県内だけではなく、岩手県や福島県から避難してきた人たちも人居している。

大学時代、長町の居酒屋で友人たちとよく酒を呑んだ。そんな仙台の〃まちなか〃にこれほどの規模の仮設住宅が建設されるとは……。仙台駅周辺は復旧が進み、震災の痕跡が薄れている。けれどもあすと長町ニュータウンの風景が、足を運ぶたび震災から続いている現実を突き付け

てくる。被災した人たちは、まさに震災が引き起こしたいまを生きているのだ、と。

二〇一三年八月十三日。まだ午前九時を過ぎたばかりだというに、汗が噴き出てくるほどの暑さだ。壁に照りつける陽射しを遮るために壁際にゴーヤなどの野菜を植えている住宅も多い。子ども用の自転車や植木鉢などが雑然と置かれた玄関先には、洗濯物が干されている。入居者の名前が記された木製の表札は、雨に濡れ、ホコリに曝さらされたせいか黒く

すんでいた。

仮設の町には、避難した人たちが二年半という歳月を過ごした生活感とともに見えない疲労が染みこんでいるようだった。

「当初は、深刻な悩みを受け止めることになるかもしれないと覚悟していました」と〈仙台いのちの電話〉の相談員の戸山一美さん(仮名/七〇歳)は切り出した。「でも、ほとんどの人はお茶のみ話をしていくだけです。私たちも電話相談と同じでこ



仮設集会所で開かれた〈ほっとカフェ〉の様子

割合でオープンする無料のカフェである。コーヒーを飲みながら、気軽に話ができる交流の場を設けたいと仙台いのちの電話の相談員が始めた活動だ。いのちの電話は自殺予防を目

ちらから被災体験を聞き出すようなことはしません。ただ、遊びにきた人に話を聞くと『ここは、つらい思い出を聞き出そうとしないから、楽なんだよな』という感想をよくいただきます。とても嬉しいですね」戸山さんは二〇一一年九月に立ち上げた〈ほっとカフェ〉の手応えをそう感じている。

ほっとカフェは、あすと長町ニュータウンをはじめるとする三カ所の仮設住宅の集会場で月に一度ほどの

的に電話で悩みを聴く活動を行なう市民ボランティアである。顔が見えない電話だからこそ、打ち明けられる思いがある。いのちの電話では相談する側も、される側も匿名だ。ほっとカフェは、匿名が原則のいのちの電話ではいまままでにない新たな試みである。

本稿でも取材に協力いただいたボランティア相談員は基本的に仮名とし、相談内容などを一部変更することをお断りしたい。

仙台いのちの電話では、自殺予防だけではなく、自死遺族支援の〈すみれの会〉を開催している。二〇一一年五月末、〈すみれの会〉のスタッフでもある戸山さんたちは、大きな悲しみを抱える被災遺族たちを支えるために何かできないかと、〈ささえあいの会〉を立ち上げた。しかし参加者はほとんどいなかった。